6年目の被災地

2017年２月撮影
写真部　伊藤賢二

◀松川浦

◀田老

震災から6年 そして今

――現実、課題、将来

造船から回す気仙沼産業

■宮城・気仙沼市　造船業
木戸浦造船・みらい造船　木戸浦 健歓社長

あの日からの6年間を、木戸浦造船の木戸浦健歓社長（写真）は「手いっぱい、走りっぱなし」と振り返る。同社の取締役から、専務、社長になっただけでなく、気仙沼の造船5社と関連会社の計7社で設立した「みらい造船」の社長にも就いた。さらに木戸浦造船、吉田造船鉄工所、小鯖造船鉄工所、澤田造船所の造船4社が来年4月にみらい造船と合併、各社の看板を下ろすと決めた6年間でもあった。

ただし、「合併はあくまで手段」と話す。

震災発生から約3か月後、がれきも残る状況で、ある遠洋マグロはえ縄漁船からドックの依頼が来た。「お前らが動けば仕込みも電装も、みんなに仕事が回るだろ」。そのひと言に、漁船漁業の産集積都市で、自らの役割を再認識した。

現在地では復旧できず

とはいえ、この地での復旧は物理的に不可能だ。造船業が集まる市内浪板地域の地盤は震災後、70センチ～1メートルも沈んだ。海から船を引くレールは、場所により十数メートルも短い。目いっぱいに上架しても満潮時は船尾が着水することがあり、海中に足場を組み、胴長をはいて作業する時もある。

気仙沼が漁船漁業の産業都市であり続けるために、それを支える造船業が、この地で十分な働きをできない。話し合い当初は「がれきの中の夢物語」だったが、新天地へ移し、産業を集約・高度化することで復旧費用の軽減や運用の効率化を見込む。技術者が一堂に会せば、柔軟なサービスを提供できる。次第に現実味を帯びていった。

技術の伝承にも合併の利点は大きい。1社では厳しい雇用も、集まれば新人育成ができる。特に設計部門で顕著だ。「CADを使えるオペレーターが増えたら、3Dデータの設計も考えられる」とは、「先延ばしにしていた必須事項」。実現に向けたよい契機という。

漁業を支える造船の役割

合併への不安とは別に「まだ勉強できることがうれしい」と話す。「例えば木戸浦造船でイカ釣り船を造ったのは昭和40年代が最後。今後はそれも自分の仕事になる。すごい話だと思うんですよ」と、目を輝かせる。

現在は建造できる造船所がない100トン以上の近海カツオ釣り船も、みらい造船はメニューに挙げる。生鮮カツオ水揚げ20年連続で日本一という、気仙沼の強みが生かせるだけでない。「これ以上隻数を減らさず、カツオ産業を続けられるために。造船所だからできる役割」と強調する。

みらい造船は平成30年春ごろに新天地での業務に組織を一本化し、31年開始を予定する。

いざという時のために…　全国へのメッセージ

何よりも人、命の優先を

また震災が起きたと考えた時、十分な対策ができているといえるだろうか。避難場所や避難経路は明確にしたが、暗くなった時を想定して備えた発電機を、女子社員が使えるとも思えない。食料や水、暖をとる方法―。考えるほどに足りないことばかりだ。

ただ言えるのは、人・命を優先にすること。人がいなければ何もできない。人命と同時に、彼らが培ってきた技術も経験も、その人が育ってきた年月も、一瞬で失う恐ろしさが災害にはある。

人さえ、命さえあれば、そこからいくらでも再開はできる。われわれが身をもって体験したからこそ、真っ先にそう言わせてもらいたい。

大型船の船尾補修の様子。地盤沈下したことで物理的に復旧できない

◀磯部

◀小名浜

◀松川浦

◀田老

◀四倉

◀気仙沼